論壇とリテラシー
——付・戦前期「論壇時評」欄一覧——

大澤　聡

はじめに

本稿は、末尾に付した「戦前期「論壇時評」欄一覧——『中央公論』『東京朝日新聞』『読売新聞』（一九三一—三六年）」のための解題を主要な目的としている。

従来、戦前期の文芸時評に関する資料整理は、主に文学研究の領域において多少なりとも進められてきた。個別の作家・批評家の行なった時評行為の分析も断片的ながらなされている。しかしながら、一方で、戦前期の論壇時評に関しては従来まったくといってよいほど検討されてはこなかった。これは奇妙なことではある。当時の知的読書の環境を把握するうえでも、あるいは言論空間の布置をさらに総体的に描出するうえでも、論壇時評の資料的考察はむしろ不可欠であると思われるからだ。

既存の学問体系において、論壇時評は非属領的なテクストとして放置され続けてきた。[注1] だが、そこには多くの学問領域に貢献しうる基礎情報が豊富に搭載されている。のみならず、論壇時評というジャンルの履歴そのものが、当時の言論状況を適宜反映した長大なテクストとして十分検討に値する対象となりうる。

そこで今回、空白を埋めるための準備作業を試みるべく、前記一覧において資料整理の成果の一部をまとめた。ここでは当該一覧の活用の展望を含め、解題の域をいくぶん超脱しながら、若干の試論的考察を添加してみたい。その際、本誌のテーマである「リテラシー」をひとつの機軸に設定する。論壇時評はいかにしてリテラシーと接合するのか。本稿はこの点をめぐって進行する。

なお、「論壇時評」という装置が当時の言説空間におよぼしたメディア論的効果については、別稿（大澤聡「「論壇時評」の誕生——一九三〇年代日本のジャーナリズム空間」）[注2] で詳しく考察している。理論的分析はそちらにゆずる。

一　リテラシーと公平さ

河合栄治郎は、論説「非常時局特別評論 第一回」（一九三七・七）のなかで、「文芸時評」や「論壇時評」というジャンルについて、わずかながら言及している。いわく、「之ら

は筆者を批判し、読者の批判力を高める使命を持つ[注3]」ものである、と。この河合の一見素朴な記述から議論を展開してみたい。

ここで時評にはふたつの機能が期待されている。ひとつは、月々の雑誌群に掲載される膨大なテクストやその生産者たちを「批判」＝監視する機能である。これは主に書き手（および周囲の文壇・論壇の構成員たち）に差しむけられる。だが同時に、その「批判」は、だれの、どのテクストを取りあげ、そしてどのように批判しているのかという、評者の振舞いそのものにおいて、時評を読む者に受容される。つまり、時評のもうひとつの機能とは、読者が〈どのテクストをどのように読解し批判すべきなのか〉を遂行的に指し示すというものである。これは、一般読者――出版大衆化状況の到来によって生成された――の批判的読解力＝リテラシーを底あげする機能といいかえてよい。時評という営為には、この二重のレヴェルに帰属した「使命」が見出されている。

さて、河合の論説に戻ろう。先の引用はこう続く。時評は「様々の傾向や流派を経過した視野の広汎な、公平と寛容と落付とを備へた大家」が担当すべきである。「狭隘な党派心」に陥りやすい新人の登用は適切ではない。とりわけ、「公式主義を振り回す一派の人々の登場は禁物である」[注4]、と。時評は教育＝啓蒙的な装置として機能することを期待される。それゆえ、ある種の「公平」さが求められる。「公平」さの実現は「大家」によってのみ可能となる。河合の理路は、さしあたりそのようにたどることができる。

ここには現実／理想といったふたつの水準の議論が混交している。つまりこういうことだ。実際に行なわれる時評からは、「公平」でない「批判」と「公平」でないリテラシー養成機能とが観察される。河合はそれに対して「公平」な「批判」と「公平」なリテラシー養成とを要求する。理想的なモデルを常識的に語ることによって、間接的に時評の現状批判を展開しているのである。現実の文芸時評や論壇時評の担当者にはある恒常的な傾向が確認される。とりわけ河合が直接関係する論壇時評においてそうであった。そこには、個別の「党派」性を帯びた論客たちがくりかえし登場する。さらには、そうした時評から河合自身がしばしば「公平」でない「批判」を受けていた（そのことは、当時の大学論や自由主義論を主題とした論壇時評を一瞥すれば、すぐに確認できるだろう）。つまり、時評の「使命」発言の背後には、河合個人の論壇政治的な利害関係が大きく絡んでいるのである。

ならばこう再整理することができる。河合の行論において時評は、「公平」なリテラシー教育装置であること（「批判力を高める使命を持つ」）を前提とし、そうであるがゆえに「公平」さが要請されたのではない。むしろ逆である。自身も不利益をこうむる時評記事の現状を批判・転轍するために「公平」さという基準が導入され、その導入の根拠として教

育的であることがあらためて措定されたのだ。そう読むべきだ。以下、私たちは、時評に関して河合が提示したふたつの機能（批判／教育）におけるふたつの位相（現実／理想）の峻別に留意しながら議論を進めていきたい。

論壇時評には現実に一般読者の論壇リテラシー――それがいかなるものであれ――を涵養する効果がある。または期待されている。してみれば、だれがそれを担当しているのかはこのうえなく枢要な問題である。

二　論壇時評の史的履歴

論壇時評の履歴をいそいで確認しておこう。[注5] まず、『中央公論』一九三一年三月号に「論壇時評」が設置される。あとを追うようにして、『経済往来』――当時、経済雑誌から総合雑誌へと転態しつつあった[注6]――も同種の企画「論壇往来」を四ヶ月後の三一年七月号から開始する。時評担当者は前者連載では毎回異なっており（前記一覧を参照）、後者は石濱知行ひとりに固定されている。これらの企画は多様化・複雑化した論壇ジャーナリズムの情報整理を目的として開設されたものと思われる。そのため、要約の効率的遂行に習熟したアカデミズム出自の論客たちが数多く起用されることになったのであろう。石濱、佐々弘雄、大森義太郎ら一九二八年に大学から一斉に追放されたマルクス主義者がこぞって名を連ねているのは象徴的だ。

しかし、完全に中立的な整理などありえない。そこには評者の主観的判断や立場性がいささかなりとも反映される。それゆえ、競合他誌に掲載された論説への批判を含むことになる。そのことは不要な紛糾をもたらしかねない。そのためもあってか、論壇時評は早々に打ち切られる。『中央公論』の「論壇時評」は、三一年十一月号の連載第九回を最後に突如誌面から消失する。『経済往来』の「論壇往来」も三二年二月号の連載八回目をもって終了する。

さて、『中央公論』の「論壇時評」が終了した一九三一年十一月、『東京朝日新聞』学芸欄に「論壇時評」欄が設置される。月初め（場合によっては前月末）に複数回に分けて雑誌論文の要点整理を掲載する、その試みは『読売新聞』文芸欄にただちに波及した。結果的にではあるが、論壇時評は雑誌から新聞へとそのメディアを移したのだといえる。『東京朝日新聞』の企画は、一九三二年四月に「論壇月評」と名称を替え、同年八月には最終的に「n月の論壇」として定着する。『読売新聞』の企画は、一九三二年一月に「評論時評」として開始され、二月の「論壇批判」を経て、同年三月以降は「論壇時評」という名称のもと継続していく（後者が「論壇時評」という名称を採用したことで、前者が差別化のために改題したという可能性も考えられる）。

媒体を新聞メディアに移した論壇時評は雑誌メディア全体への批評に傾斜する。「論壇」とは何か、またいかにあるべ

きか、という問題を自己言及的に検討するプロセスにおいて、論壇の中心的基盤となる総合雑誌の編集方針が批判対象となるのである。論壇時評は論壇＝雑誌ジャーナリズムの成熟期に、いわばそのチェック機関として存在することになる。その後、「論壇時評」は用語としても一般的認知を獲得し広く流通することになる。多くの活字メディアにおいて単発的に援用される。ジャーナリズムの動向に一定の影響力をおよぼすようになる。

しかし、次第に論壇時評は掲載が困難になっていく。時局進展とともに新聞には（雑誌以上に）制約がかけられるようになるからだ。とりわけ、時局批判に関わる議論の掲示は具体的に制限されてしまう。政治や経済など現実の政策決定に言及する論壇（について論評する）時評はおのずと萎縮せざるをえなくなる。『東京朝日新聞』「n月の論壇」欄と『読売新聞』「論壇時評」欄は、ともに一九三六年四月をもって常設を停止し、間歇的な掲載形態へと変わる。さらに、三七年七月の日中全面戦争の勃発と、それを受けた翌三八年九月の新聞用紙制限令の実施以降は、紙面の物的制限のためにほとんど存続不可能となる。論壇時評は新聞から排除されるという結末をむかえるのである。

この段階でひとつの現象が確認される。総合雑誌に論壇時評が復活するのだ。『日本評論』――総合雑誌化を完遂した『経済往来』が三五年一〇月に改題――の三六年八月号に、S・O・S「論壇時評」が発表される。それ以降、同誌は匿名による論壇時評を目玉企画として長期にわたり連載する。時局進展とともに新聞内に存在しえなくなった論壇時評は、雑誌へと還流したのである。結果的にそう見立てることができよう。そして、新聞掲載の論壇時評の場合よりもいっそう若い（字義どおり）匿名の書き手たちがそれを担当する。冒頭の河合の不満はこうした文脈のなかで、一九三七年に提出されている。

三　時評担当者の傾向

河合は論壇時評の書き手（の属性）に不満をいだく。では、具体的にどういった論客たちが執筆を担当したのか。一覧を参照しよう。今回、前節で触れた『中央公論』（一九三一年）、および『東京朝日新聞』『読売新聞』（一九三一―三六年）の論壇時評を一覧形式で整理した（無論、論壇時評はこれらに限定されない。ここではまとまった連載企画としてピックアップしたにすぎない）。担当者の流れを把握することに主眼を置いたため、詳細なデータは極力排除してある。

一覧からうかがえるように、『中央公論』の「論壇時評」はあきらかに担当者再用を回避している。社会／言論の複雑化に対応すべく観測点の分散化が試みられた結果であろう。前述のとおり、そもそも論壇時評の誕生自体がジャーナリズムの量的拡大に対応したものであった。だが、重複回避が可

能であったのは当該連載が九ヶ月という短期間だったためである。新聞両紙の連載期間は六年におよぶため、再用は不可避となる。その再用において一定の傾向が発生している。

いささか粗暴な手続きではあるが、両紙論壇時評のデータを統合し、担当回数の多い順に論者名をあげておこう。

6回　向坂逸郎（朝4／読2）、戸坂潤（朝3／読3）
5回　大森義太郎（朝2／読3）、室伏高信（朝1／読4）
4回　佐々弘雄（朝1／読3）、石濱知行（朝1／読3）、長谷川如是閑（朝2／読2）、山川均（朝3／読1）、栗生武夫（朝1／読3）

※（　）内は合計回数の内訳
「朝」＝『東京朝日新聞』／「読」＝『読売新聞』

向坂、戸坂、大森、佐々、石濱といった論客が上位を占める。彼らは早い段階で官学アカデミズムから排斥され、論壇ジャーナリズムに活路を見出した。マルクス主義を理論的備給点としつつ、膨張したジャーナリズムの商業主義的な要求を先取的に汲み取ることで、一躍論壇の寵児となる。執筆準備の煩雑さゆえに既存の書き手たちが時評の執筆依頼を受けたがらないなか、新人の彼らは卓越した情報処理能力をもって積極的に対処していく。[注7] また、室伏や長谷川といった年長世代の評論家も上位に食い込んでいる。彼らは大正期の「文明批評家」の系譜に列なる感性をもとに時代診断を提示していった。

いうまでもなく、前者は河合のいう「公式主義を振り回す一派の人々」に、後者は「公平と寛容と落付とを備へた大家」にそれぞれほぼ該当する。この上位の構成は、そのまま一九三〇年代前半の論壇状況の縮図になっている。細部に拘泥した静態的分析に終始する前者（＝講壇批評家の勃興）と、時代全体を見とおし牽引していくような批評を理想とする後者（＝文明批評家のリヴァイヴァル）。

後者は批評の旧来型の批評理念を基準として前者のスタイルの卑近性を批判し続ける。しかし、その批判にもかかわらず、論壇のヘゲモニーは着実に後者から前者へと移行していく（むしろ、だからこそ後者は前者を執拗に批判したのである）。この移行は不可逆的なものだ。そうした転機にあって、論壇時評の担当は前者に傾斜する。この時評の傾向は、論壇ジャーナリズム全体におけるヘゲモニー移行を促進させる一定の原動となったと思われる。だがそれはいかにしてか。補助線を引いてみよう。

四　リテラシー養成面の規定力

たとえば、室伏高信「二分の一ジャアナリズムの横行」（一九三一・二）は、ジャンルとしての時評が隆盛するさな

かに、こう推測している。

この頃では、大抵な悧巧な青年は、雑誌の小説を一々読む代りに、新聞の月評をのぞいたゞけで間に合せると聞いてゐる。論壇時評なるものゝ近頃流行し出したのもこの種の新しい読者心理に訴へるためであるかも知れない。[注8]

知的青年たちは頁数の多い小説作品や膨大に存在する高度な論文をすべて読み込み消化することをあらかじめ断念する。かわりに時評に目をとおすことで流行の知的情報を補填している。ダイジェストという中間項の介在によって、原典にアクセスする労力と時間はたしかに節約される。しかし、そこで摂取可能な情報は完全に時評者に管理されている。その端的な被拘束性こそが、出版大衆化時代以降に新たに生成された読者共同体をつねに規定している。

こうした読書のあり方は一般読者の代表である知的青年層に限らない。三木清「批評の生理と病理」（一九三二・一二）は、次のように述べる。

今日或る人々はもとの論文やもとの作品を読まないで新聞や雑誌の論壇時評や文芸時評或は「豆戦艦」などを読むだけでその論文やその作品についての定まつた意見を作つてゐるといふことがなくはなからう。これは固より歓迎すべきことでない。然しながら批評家・プロフエツサーと雖も時には同様な遣方をしないといふことは不可能である。[注9]

専門家的な読書人までもが、ときに時評類（引用中の「豆戦艦」は『東京朝日新聞』に連載された月々の雑誌短評）を手軽なマニュアルとして活用する。そのことによって以下のような回路が開かれるだろう。ある評者の私的な「意見」や批判が時評という半ば公的な意匠をまとって多くの専門人のもとに届けられる。そして、彼らは時評で得た知識・認識を素地として「意見」を形成し各自の仕事に反映させる。かくして、私的な「意見」が公共性を獲得していく。

三木が懸念するのは、そうした効率化を優先する読書環境の整備が「精神のオートマテイズム」[注10]をもたらしてしまう可能性だ。つまり、時評（的な）言説への過剰依存は思想の定型化へと帰着するというのである。それは批評精神の空無化を意味する。この三木の危機感は正当なものである。

ことほどさように、時評という装置には、個別のテクストや書き手はもとより、言論空間の全体的な趨勢をも規定していく〈力〉が可能的に備わっている。ならば、特定の政治的立場に依拠する複数の論客が連続的に論壇時評を担当する、その事態は――評者自身の意図にかかわらず――知的公共圏の集団的心性を彼らの思想へと誘導する効果をもちかねない。

こう考えるのが自然であろう。河合が苛立つのはそれゆえでもある。だからこそ「公平」（を実現する「大家」）を求める。

この「公平」さの要求は一般的に観察されるものだ。たとえば、見多厚二「大森義太郎氏の時評」（一九三四・七）は、「社会時評」の条件のひとつに、「社会現象を公正なる眼で批評」することをあげている。そのうえで、大森の時評の偏向性を指摘する（最終的に「社会時評を大森義太郎に書かせることは無益にして有害」とまで激烈に裁断する）[注11]。時評の現状を批判する常套として「公正」「公平」の要請が行なわれるのだ。ここで重要なのは、「公平」な言論など本来的に不可能であるという事実を指摘することではない。そうではなく、なぜかくも「公平」＝理想が叫ばれるのかを考察することである。

現実に論壇時評は読者の論壇リテラシーの方向性をかなりの程度決定してしまう。もちろんそれは、冒頭で河合が示した理想的な「批判力」育成とは異なる。「批判」の雛型がマニュアル的に伝授されるだけだからだ。理想のリテラシーとは、むしろそうした時評そのものをも批判的に読解しうる能力でのことである。では、その能力はどこで習得されうるのか。こう問いを進めていった結果、時評における「批判力」育成そのものがきわめて困難な課題であることがあきらかとなる。

おきているのはむしろ、読者のリテラシーを規定する位階を獲得するための闘争である。

五　基礎資料の精緻化へ

論壇時評は時評を遂行するという営為そのものによって論壇を言説的に存立させていくメディアである。ところが、その営為は論壇の様々な可能性を欠落させることで可能になっている。その欠落のもと、一般読者や書き手を包摂するかたちで論壇周辺の知的公共圏が成立している。それゆえ、論壇の存立機制を捉えかえすためにも、論壇時評担当者の傾向はあらためて整理されなければならなかった。これが今回の一覧作成における理由のひとつである。

別の理由もある。最後に一点だけ簡単に触れておこう。論壇時評は、リアルタイムでそれを読む者のリテラシーを養成する。私たちはそのことを確認した。しかし、それのみならず、時空を超え研究者的態度でテクストを解読する後代の読者のリテラシーを養成する効果も畳み込まれている[注12]。つまり、時評によって、テクストをとりまく当時の無意識的な前提条件――時間性に耐ええず風化してしまっている――の意識的な獲得が可能になるのである。このことは、いかなる研究領域であれジャーナリズムに発表された歴史的テクストを日常的に取り扱う者であれば手続き上の経験として理解可能であろう。政治学、経済学、思想史など論壇ジャーナリズムとの相互浸透のなかで形成された学知を捉えかえすための重要な基礎資料として時評は活用されうる。

しかし、いましがた述べたことと同型の問題がただちに発生する。資料がはらむ傾向性の把握が要求されるのだ。やはりここでも求められるのは、時評を批判的に活用するためのリテラシーである。時評テクストは単独では有効な参照項にならない。

そのために、私たちは以下のような作業に進むことが求められるだろう。たとえば、各回の時評記事で言及された固有名を網羅的に抽出し、誰が誰のテクストに直接言及したのか、その相互連関をあきらかにする作業。先述のとおり、今回の一覧では掲載分量の都合からその詳細なデータを割愛せざるをえなかった。出現頻度や関係性の強度を視覚的に表現するキーグラフの利用なども考慮したい。斑状に分布した固有名のあいだに潜在するネットワークの可視化は、時評を批判的に読解する能力につながるだろう（同時代読者にとって時評内在的なリテラシーの習得が困難であった理由は、おそらくこうした全体性把握の不可能性に由来している）。

あるいは、論壇時評のみならず、文芸時評や社会時評、さらには新聞時評やラジオ時評といった他の時評群の履歴との包括的な接合作業。そのつきあわせのなかで、時評形式そのものがもつ性質と論壇時評だけが特有する性質とが識別可能になるはずだ。ただし、これらの作業は別の機会を待つほかない。

注

（1）戦後の論壇時評を考察したものとしては、道場親信「「論壇時評」の戦後史――新聞と雑誌ジャーナリズムの交点」（『駿台フォーラム』第一四号、一九九六年七月）、辻村明「朝日新聞の仮面――「論壇時評」の偏向と欺瞞をつく」（『諸君！』一九八二年一月号および二月号）などが存在する。

（2）大澤聡「「論壇時評」の誕生――一九三〇年代日本のジャーナリズム空間」（『出版研究』第三九号、二〇〇九年三月刊行予定）。

（3）河合栄治郎「非常時局特別評論 第一回」（『日本評論』一九三七年七月号）、二一頁。

（4）同前、二一頁。

（5）本節の記述は、前掲「「論壇時評」の誕生」と部分的に重複する。詳細はそちらを参照されたい。

（6）大澤聡「雑誌『経済往来』の履歴――誌面構成と編集体制」（『メディア史研究』第二五号、二〇〇九年近刊）を参照されたい。

（7）前掲「「論壇時評」の誕生」では、こうした批評様式を「《レジュメ》的知性」と呼んだ。そのモードの浸潤は同時代に文芸批評の領域でも進行している。たとえば大宅壮一のテクストがそうである。大澤聡「脱神聖化する文学領域――大宅壮一の文壇ジャーナリズム論」（『日本文学』第五七巻第一号、二〇〇八年一月）を参照されたい。

（8）室伏高信「論壇時評【1】二分の一ジヤアナリズムの横行」（『読売新聞』一九三二年二月二十五日朝刊）、四面。

（9）三木清「批評の生理と病理」（『改造』一九三二年十二月号）、

二二頁。

(10) 同前、二三頁。

(11) 見多厚二「左翼レヴユー・ガール　大森義太郎氏の時評」(『現代新聞批判』第一六号、一九三四年七月一日)、一一頁。

(12) 大澤聡「大宅壮一と小林秀雄——批評の「起源」における複数的可能性」(仲正昌樹編『歴史における「理論」と「現実」』御茶の水書房、二〇〇八年)で展開したように、大宅壮一に代表される現象批評には、当時の文壇情報が圧縮的に収蔵されている。そのため、同時代的のみならず歴史的にも有益な参照項として機能し続ける。これと同様の機能が同時代の論壇時評に確認されるのだ。

付・戦前期「論壇時評」欄一覧

——『中央公論』『東京朝日新聞』『読売新聞』(一九三一——三六年)——

大澤　聡

本一覧は、一九三〇年代前半における『中央公論』、『東京朝日新聞』、『読売新聞』の「論壇時評」欄を時系列順にそれぞれ整理したものである。ただし、別名称同類の記事もここでは「論壇時評」として一括した。

◆『中央公論』(1931年)

1931(昭和6)年

3月　石濱知行「論壇時評」

4月　佐々弘雄「論壇時評」

5月　住谷悦治「論壇時評」

6月　大森義太郎「論壇時評——学術雑誌の正体」

7月　高橋正雄「論壇時評——政府の整理策をめぐつて」

8月　阿部勇「論壇時評——世界恐慌と資本主義の一般的危機」

9月　杉森孝次郎「論壇時評」

10月　林要「論壇時評」

11月　平貞蔵「論壇時評——労働党政府の壊滅を中心として」

◆『東京朝日新聞』(1931—36年)

a　各月の担当者と掲載タイトルを記す。紙幅の関係上、副題や掲載

面数などは割愛した。

b　欄の名称の変化は※印に続いて注記した。

c　掲載日を（　）内に記した。前月末に発表された場合は「（月・日）」の形式で記した。

1931（昭和6）年

11月　**猪俣津南雄**　※以降「論壇時評」欄として

「ファッショ横行」（8）、「恐慌の新しい浪」（9）、「マルクス主義前進」（10）

12月　**河上肇**

「ファシズム論批判」（1）、「社会民主主義」（2）、「英・労働党の評価」（3）、「若干の経済理論」（4）

1932（昭和7）年

1月　**赤松克麿**

「議会政治再吟味」（1）、「サルの尻笑ひ」（3）、「偏執狂的な論壇」（4）、「政変を顧みる」（5）

2月　**長谷川如是閑**

「許された評論」（1）、「猿まはしのムチ」（2）、「大アジア主義」（3）

3月　**山川均**

「何に投票したか」（1）、「独裁政治の宣言」（2）、「ファシズム検討」（3）、「『搾取なき楽土』」（4）

4月　**大森義太郎**　※以降「論壇月評」欄として

「ファッシズム論はもう片づいたか」（3・30）、「いま出盛りの『満洲新国家論』」（3・31）、「最も活躍してゐる論壇の花形」（1）、「学術的な論文へ視界を転じて」（2）

5月　**谷川徹三**

「常識の限界【上】」（3）、「常識の限界【下】」（4）、「下らぬ巻頭論文」（5）、「誤解された哲学」（6）、「哲学界の一傾向」（7）」

6月　**高橋亀吉**

「雑誌の使命」（5・31）、「雑誌編輯者へ」（1）「最近の主要題目」（2）、「無批判な焼直し」（3）、「金再禁止の功罪」（4）

7月　**向坂逸郎**

「アナキズム排撃」（1）、「農村疲弊の問題」（2）、「満洲国問題と齋藤内閣の展望」（3）、「女大生の獄中記」（4）

8月　**土方成美**　※以降「n月の論壇」欄として

「統制経済の必然性と機構」（5）、「統制経済の二つの型」（6）、「国内市場中心へ」（7）、「農村窮乏対策」（8）、「恐慌見舞金」（9）

9月　**佐々弘雄**

「戦争論（一）」（1）、「戦争論（二）」（2）、「政局観」（3）、「満洲問題―景気―哲学」（4）

10月　**有澤廣巳**

「賑ふ戦争論」（3）、「マルクス主義戦争論の検討」（4）、「何を救つたか」（5）、「満洲国の幣制」（6）

11月　**住谷悦治**

「日ソ関係批判」（10・28）、「異端政治学」（10・29）、「ファシズム論に対する疑義」（10・30）、「新理論の基礎」（10・31）、「農村運動の思想的特徴」（1）

12月　**馬場恒吾**

「最善の批評 最終の批評」(1)、「政界気象図」(2)、「警鐘乱打に終る」(3)、「新聞時評を評す」(4)

1933(昭和8)年

1月 **本位田祥男**
「『戦争進化論』」(8)、「公債九十億」(9)、「為替安定策」(10)、「新聞時評批判」(11)

2月 **新明正道**
「インフレ時代」(1・31)、「議会同盟の提唱」(1)、「国際非常時」(2)、「テクノクラシー」(3)

3月 **杉森孝次郎**
「自由主義末期」(4)、「国際日本観」(5)、「率直な連盟論」(6)、「芸術性の支配」(7)

4月 **青野季吉**
「政治批判の窒息」(3・29)、「弗悲劇の問題」(3・30)、「経済封鎖の『謎』」(3・31)、「ショーと西田哲学」(1)

5月 **戸坂潤**
「離婚と哲学【上】」(3)、「離婚と哲学【下】」(4)、「文化と教養」(5)、「文明と技術」(6)

6月 **山川均**
「論壇梅雨期」(4)、「リベラリズムは何処へ行く」(5)、「『西に焚書 東に禁書』」(6)、「精神の役割」(7)

7月 **恒藤恭**
「文化危機に備ふ」(6・28)、「自由の保障」(6・29)、「大学の史的考察」(6・30)、「佐野・鍋山の転向」(1)

8月 **大宅壮一**
「転向・転心・没落」(7・29)、「京大問題再検討」(7・30)、「文芸批評不振」(7・31)、「自由主義者の弁」(1)

9月 **笠信太郎**
「新秋さびし」(8・31)、「経済ブロック批判」(1)、「世界経済会議の決算報告」(2)、「京大の焼跡」(3)

10月 **馬場恒吾**
「非常時の発展」(9・26)、「論壇の進歩」(9・27)、「政界観測」(9・28)、「自由主義検討」(9・29)

11月 **長谷川如是閑**
「集団意識の強化」(6)、「自由主義の煩悶」(7)、「一九三六年」(8)、「『現代新聞論』」(9)

12月 **猪俣津南雄**
「危機克服の叫び」(3)、「皇道論の久原版」(4)、「荒木陸相の思想」(5)、「三つの戦争論」(6)

1934(昭和9)年

1月 **上田貞次郎**
「期待を裏切らる」(4)、「議会制度の危機」(5)、「『言論の自由』」(6)、「明治維新の研究」(7)

2月 **室伏高信**
「素人の登場」(4)、「二つの座談会」(5)、「無血の転向」(6)、「思想体系の価値」(7)

3月 **伊藤正徳**
「雑誌のトン数」(4)、「心の修正を望む」(5)、「興味ある対象」(6)、「巻頭論文の春」(7)

4月 **石濱知行**

『民族と平和』」（3）、「勇敢なる宣言」（4）、「老骨堂の言葉」（6）、「三家の風格」（7）

5月 **末弘厳太郎**
「雑誌建築の玄関」（6）、「教育刷新の声」（7）、「ソシヤルダンピング問題」（8）、「人物評論の意義」（9）

6月 **林癸未夫**
「自由主義者の占拠」（2）、「迷へる米穀対策」（3）、「資本家の労働者観」（4）、「天羽声明の批判」（5）

7月 **高橋亀吉**
「今月の経済問題」（3）、「低賃銀問題」（4）、「蚕糸恐慌と農村問題」（5）、「日蘭会商問題」（6）

8月 **栗生武夫**
「新人のナチス論」（7・28）、「重臣会議論」（7・29）、「華々しき論戦」（7・30）、「うはさの分析」（7・31）

9月 **向坂逸郎**
「不安の問題」（1）、「戦争と経済」（2）、「政党の復活力」（3）、「追はれる雑草」（4）

10月 **津村秀松**
「政治季節来る」（3）、「国家主義批判と農村工業化の問題」（4）、「マルサス死後百年」（5）、「軍事費の財源」（6）、「米国の銀政策」（7）

11月 **新明正道**
「軍部国策の批判」（2）、「財政整調と外交への期待」（3）、「民衆の生活記録」（4）、「知識階級の動向」（5）

12月 **戸坂潤**
「松岡型の言論」（1）、「常識の下婢」（2）、「哲学の扮装」（3）、「統計の必要」（4）

1935（昭和10）年

1月 **猪俣津南雄**
「労働者の状態」（7）、「スターリンとウエルズ一問一答録」（8）、「農村問題」（9）、「軍部の政治進出史その他」（10）

2月 **大森義太郎**
「学術的な論文」（2）、「財政・凶作・官吏」（3）、「時評ふうの論文」（4）、「ベルグソン論など」（5）、「文学的論文」（6）

3月 **宮澤俊義**
「『美濃部達吉論』」（5）、「宗教の検討」（6）、「太平洋の問題」（7）、「学年末非常時」（8）

4月 **山川均**
「春風未だ到らず」（3・31）、「民族主義の行進ラッパ」（1）、「現代の自由主義」（2）、「資本の攻勢」（3）、「資本家の凱歌」（5）

5月 **河田嗣郎**
「自由主義の顛落非顛落」（4・27）、「日本フアッシズム」（4・28）、「統制経済の進行と再検討」（4・29）、「日本主義の立場」（4・30）

6月 **中野正剛**
「審議会と調査局」（5・31）、「国防と財政」（1）、「学者の要望」（2）、「欧洲の風雲」（3）、「一木喜徳郎論」（4）、「小栗警視総監」（6）

7月 **猪谷善一**
「鶏群の一鶴」（2）、「巻頭論文の貧困」（3）、「興味ある評

論」(4)、「北支事変の解剖」(5)、「経済界の前途」(6)

8月　**鈴木義男**
「指導的論策」(5)、「興味ある報告」(6)、「日本ファッシズム」(7)、「自由主義論戦」(8)

9月　**戸坂潤**
「法律の進化」(8)、「国家・法律・議会」(9)、「民族と皮膚色」(10)、「非合理の問題」(11)

10月　**土屋喬雄**
「日本資本主義発達史の諸論」(4)、「学位問題賑ふ」(5)、「経済問題を拾ふ」(6)、「議会主義の擁護」(7)

11月　**今井登志喜**
「自由主義を繞る」(3)、「農村問題に就て」(4)、「偶然と必然」(5)、「文化の民族性」(6)

12月　**谷川徹三**　※この月のみ「論壇問答」欄として(A／Bの対話形式)
「今日の大学」(3)、「文学者と政治」(4)、「文化の地盤」(5)、「政治・外交・文化」(6)

1936(昭和11)年

1月　**馬場恒吾**
「自由と統制」(12・28)、「政治評論を読む」12・29)、「地図を作るもの」(12・30)、「真理と戦争」(12・31)

2月　**向坂逸郎**
「選挙と論壇」(3)、「『議会制の凋落』」(4)、「英雄の標本」(5)、「読物風の論文」(6)

3月　**青野季吉**
「政治線と議会制」(11)、「進歩的とは何か」(12)、「日本資本主義論争」(13)、「若い世代と教育」(14)

4月　**林癸未夫**
「二・二六事件」(6)、「新内閣の意義」(7)、「統制経済論」(8)、「無産党躍進」(9)

10月　**向坂逸郎**　※「論壇展望」欄として
「論争の多きは問題の摘発に原因」(7)、「最大の収穫は」(8)、「賑々しい電力案」(9)、「知識層の敏感」(10)、「三つの「青年論」」(11)

◆『読売新聞』(1932—36年)
表記については『東京朝日新聞』と同じ。

1932(昭和7)年

1月　**長谷川如是閑**　※「評論時評」欄として
「ジャーナリズムの取りあげた資本主義の解剖」(1)、「世界不安の問題」(3)、「ファシヨ諸問題」(3)、「矢野教授の満蒙論」(6)、「狩野亨吉博士説「人類の三大妄想」(7)

2月　**佐々弘雄**　※「論壇批判」欄として
「金融的事件」(5)、「金融的事件?」(6)、「国民社会主義の分析」(7)、「蠟山教授のアジアモンロー主義」(9)、「国際危機爆発に関する読物」(11)、「大塚博士の論文」(12)

3月　**室伏高信**　※以降「論壇時評」欄として
「二分の一ジヤアナリズムの横行」(2・25)、「羊たちは途を失つた!」(2・26)、「だれマルクスの一団」(2・27)、「ファッショは理解されたか」(2・28)

9月　**石濱知行**
「景気善導の一使徒」(8・30)、「敵を知らざる討伐者」(8・31)、「淋しい『無産政治戦線の統一』」(1)、「エンゲルスのバルザック論」(2)

10月　**佐々弘雄**
「リットン報告書の批判と非常時日本の態度」(5)、「ヂャーナリズムの動向を示す現代評論の分野」(6)、「指導理論のない理由並に須井一の思想」(7)、「特殊雑誌の暴露物と長谷川、高橋氏等の論文」(8)、「危機神学の反動性並に時局を取扱つた論文」(9)、「大内、石濱氏等の論文と雑然たる素材の配列」(11)

12月　**新居格**
「日ソ不侵略条約論」(2)、「政論もまた「隅歩時代」?」(3)、「新聞批評の批評」(6)、「「ヂャーナリズムの批評」論」(7)

1933(昭和8)年

2月　**木村毅**
「来月初旬来朝するショウを迎へる予備知識【上】」(2)、「来月初旬来朝するショウと最近の彼の動静【下】」(3)、「インフレ論と政治論」(4)、「明治文学論とプロ批評」(5)

3月　**佐々弘雄**
「世界政治の破局を繞つて」(12)、「米国金融大恐慌の極東政治への影響」(14)

4月　**山川均**
「超特非常時の論壇」(8)、「羽二重の「ふんどし」を締めて」(11)、「焦土外交の宿酔」(12)、「リベラリズムへの思慕」(13)

6月　**鈴木茂三郎**
「「白髪染め」で染めたブルジョア自由主義」(5・31)、「現代政治評論四人男」(1)、「世界経済会議と日本」(2)、「非常時の経済諸論文」(3)、「圧殺された言論の自由」(4)

7月　**大森義太郎**
「ナチス日本版」(6・27)、「暴露された京大事件」(6・28)、「転向問題是非論」(6・29)、「政治的自由と自由主義者」(6・30)

8月　**栗生武夫**
「有意義な二問題」(7・27)、「京大問題の諸論文」(7・28)、「地平線を抽く恒藤氏」(7・29)、「大森氏の意志自由論」(7・30)

9月　**恒藤恭**
「自由の価値」(2)、「非常時経済論」(3)、「犯罪論と思想対策論」(5)、「京大問題の種々相」(6)、「非、非常時的論文」(7)

12月　**杉森孝次郎**
「議会主義か独裁主義か」(11・30)、「階級意識のナシヨナリズムへの解消及内衝の問題、その他」(1)、「国際情勢に於ける革命的動向の客観及主観、その諸片鱗」(2)、「ミネルヴァ(ママ)の梟と暁鶏と」(3)

1934(昭和9)年

1月　**恒藤恭**
「非常時社会の再認識」(1)、「日本精神と世界経済との交渉」

(3)、「国論者としての議会」(5)、「非常時は奇蹟を生まず」(7)

2月　**三木清**
「政党政治の諸問題」(1・26)、「帝国文芸院の計画批判」(1・27)、「医博濫造のセオリイ」(1・28)、「河合教授の「大学改造論」」(1・30)

3月　**室伏高信**
「時の論理」(3)、「時代感覚の欠乏」(4)、「社会主義は進展したか」(6)、「餓えたる魂」(7)

4月　**伊藤正徳**
「新聞批判の傾向」(3・24)、「寺田氏の新聞論」(3・25)、「記者の生活・座談」(3・27)、「自由に光あれ」(3・28)

5月　**戸坂潤**
「文芸復興時代」(4・27)、「政治復興とは何ぞや」(4・28)、「宗教復興の問題」(4・30)、「科学復興(?)の問題」

6月　**大宅壮一**
「芸術の合理化」(5・29)、「旧きものと新しきもの」(5・31)、「「文芸復興」論」(1)、「社会時評の無力」(2)

7月　**室伏高信**
「巻頭論文の価値」(6・25)、「官僚の台頭」(6・27)、「政変観測と政治学」(6・29)、「日本主義と反日本主義」(6・30)

9月　**栗生武夫**
「シエストフ的不安」(8・30)、「過剰人口と農民危機」(8・31)、「ヒットラー・ルーズベルト・岡田」(1)、「司法制度の根本改造」(2)

10月　**大森義太郎**
「現下の主要題目は何か」(9・28)、「農村問題は何処へ」(9・29)、「戦争問題数件」(9・30)、「市電争議を繞りて」(2)、「みすつぇれん」(3)

11月　**向坂逸郎**
「知識階級の困惑」(10・26)、「非常時財政各論」(10・27)、「パンフレット問題」(10・28)、「科学と人間社会」(10・30)

1935(昭和10)年

2月　**室伏高信**　※この月のみ「2月号の雑誌から」欄として
「成人ジャアナリズム」(1・26)、「政治理論と経済理論」(1・29)、「宗教への関心」(1・30)、「批判の進歩性と反動性」(1・31)、「時の感覚の欠乏」(1)

3月　**大森義太郎**
「土居の文章論」(2)、「戦争経済論」(3)、「矢内原氏の宗教論」(5)、「笠君の経済論」(6)、「知識階級論批判」(7)

10月　**石濱知行**　※「時論的に観た論壇」欄として
「選挙粛正」(9・28)、「伊太利・エチオピアの葛藤」(9・29)、「農村と産業組合」(1)、「学校・学生の問題」(2)、「二つの諷刺的論文」(3)

11月　**宮澤俊義**
「刑法類推禁止論と大森氏の「博士談義」」(6)、「白票の道徳性」(7)、「エチオピア問題」(8)

12月　**栗生武夫**
「現代への四五の渦点」(11・29)、「支那問題論文への難点」(11・30)、「封建的農村地代と解放」(1)、「進歩性なき大学の講義」(3)

1936（昭和11）年

1月　**長谷川如是閑**　※この月のみ「新春論壇」欄として

「国民意識の高潮と批判」（1）、「民族発展の過程は」（4）、「条件反射学の世界観」（5）、「真理の法則を求むるもの」（7）、「ジャーナリズム道徳」（8）

3月　**戸坂潤**

「現下の時局から観た議会、政党、官僚、軍部」（2・25）、「抽象論のタイプ」（2・26）、「中間的外交解説」（2・27）

4月　**谷川徹三**

「事件とその反映」（3・27）、「事件と雑誌の認識」（3・28）、「流言蜚語の社会性」（3・29）、「内閣調査局と如是閑氏の時局観」（3・31）

9月　**戸坂潤**

「批評発表の困難相」（1）、「確信なき思想的評論」（2）、「思想的資格の有無」（3）、「思想―教養―感覚」（4）

10月　**石濱知行**

「科学侮蔑の時代」（9・26）、「電力国営論」（9・29）、「蘇連・支那・西班牙」（9・30）、「ミツセラニアス」（1）

11月　**向坂逸郎**

「準戦時状態とは」（10・29）、「大福帳的観念」（10・30）、「支那の科学的研究」（10・31）、「問題の『極東の危機』」（1）

＊本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（おおさわ・さとし／東京大学大学院）